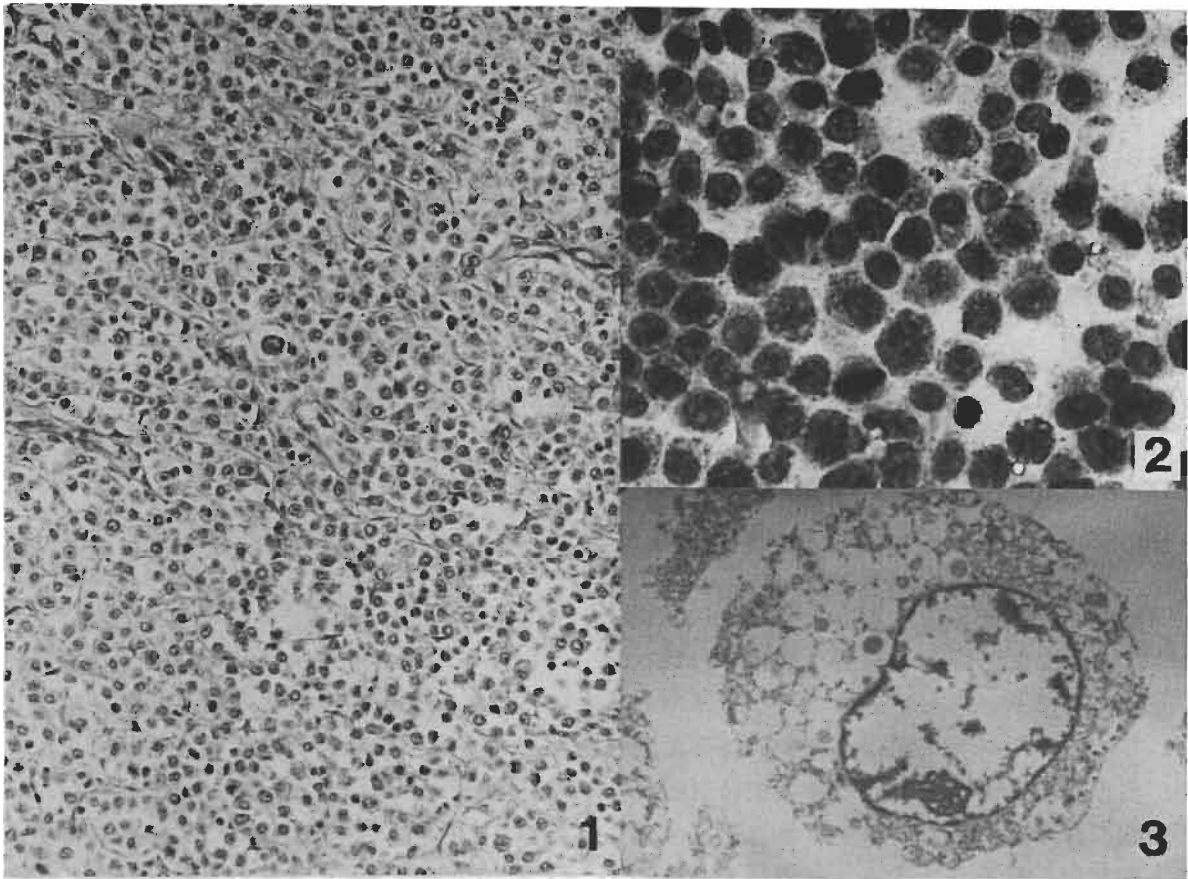


犬の腸管を巻き込んだ腫瘍

鹿児島大学農学部家畜病理学教室出題 第31回獣医病理学研修会標本No.559



動物：犬，ドーベルマン種，雌，7歳，21kg。

臨床的事項：頻回の嘔吐により上診，触診により腹腔内に小児拳大の腫瘍を認めた。2週後にX線で8×20cmの腫瘍を検出。さらに2週間後に試験開腹を行い，腸管を巻き込んだ腫瘍25×15cmを認め，予後不良として安楽死させ，剖検した。

剖検所見：腹腔内に，小腸のほぼ全域を巻き込んでいる白色～灰白色の腫瘍を認め，腸間膜はこの腫瘍の増殖によって占領され，腸間膜リンパ節は認められなかった。腎門部には副腎を包み込んだ小児拳大の灰白色腫瘍があった。肺の全葉に粟粒大～そら豆大の白色結節が密発し，脾，腎，心，子宮に粟粒大～隠元豆大の白色結節が散発していた。肝には径1mmの白色結節が1ヶあった。十二指腸粘膜面に広範な糜爛と4ヶの小潰瘍(最大0.5×3.0cm)を認めた。腹腔の大腫瘍の塗抹をマイ・ギムザ染色で鏡検すると，大小や、不同の単核円形細胞の細胞質内にメタクロマジーを呈する顆粒が多数認められ，有糸分裂像も多かった(写真2)。提出標本は，小腸横断面とそれに附着する腫瘍。中性緩衝10%ホルマリン固定，HE染色。

組織学的所見：腫瘍細胞は類円形，大小不同で多形性を示す単核細胞が主であるが，巨細胞あるいは多核巨細胞も散見された(写真1)。核質が核膜に集り，比較的明るい核と1～2箇の明瞭な核仁を有する細胞で，有糸分裂像が多数認められた。細胞質は好酸性の微細顆粒が散在する空胞状を呈した。この顆粒はトルイジンブルー(pH2.5)でメタクロマジーを，PAS染色では陽性を示した。

腫瘍細胞間に細い結合織が入り込み，好酸球の浸潤が目立った。腫瘍細胞は腸の筋層から粘膜下織に浸潤し，粘膜固有層に侵入している場合もあったが絨毛の構造に著変を与えていなかった。

電子顕微鏡の所見：ホルマリン固定材料から起した電頭試料により，細胞質内顆粒の電子密度はあまり高くなく，空胞化の著明な，脱顆粒像を認めた(写真3)。

診断及び考察：以上の所見から，小腸あるいは腸間膜原発の悪性肥満細胞腫と診断した。犬における小腸原発肥満細胞腫の報告例は非常に少ないが，腫瘍細胞の多形性や脱顆粒などの特徴が今回の例に一致している。討議において，腸間膜原発であろうという意見があった。